

○日本新産セトヤナギスブタ (新称) (浜島繁隆) Shigetaka HAMASHIMA :  
*Blyxa alternifolia* (Miq.) Hartog newly found in Japan

愛知県瀬戸市上半田川町の山中 (標高約 370 m) に、山林に囲まれた小規模な水田が

開けている。1980年10月7日この地の水田雑草を調査中ヤナギスブタ *Blyxa japonica* Maxim. に混じって、やや大形種を見つけた。外見は、ほとんどヤナギスブタを思わせるが、種子の形態から別種であり、東南アジアに分布する *B. alternifolia* であることが確認できた (Fig. 1)。日本では初めての分布と思われるので、和名は発見した地名をとり、セトヤナギスブタ (新称) とした。本種の形態はつぎのようである。

水中茎は分岐し横に這い、基部の節からひげ根を出す。長さ 10-25 cm, 多くの葉をつける。葉は線形, 互生, 無柄, 長さ 6-8 cm × 0.2-0.4 cm, ふちに細鋸歯がある。花は8-10月, 葉腋より1個でて、長さ約 2.7 cm の円筒状の苞鞘に下部は包まれ, 2-3 mm の柄をもつ。両性花。がく片3, 大きさ 5.5 × 1.5 mm, 線状皮針形。花弁3, 白色, 大きさ 10 × 0.5 mm, 線形。雄ずい3, 花糸 2 mm。花柱先端より約 10 mm, 3裂。種子紡ずい形, 大きさ 2 × 0.7 mm, 先端とがる。種皮の表面に突

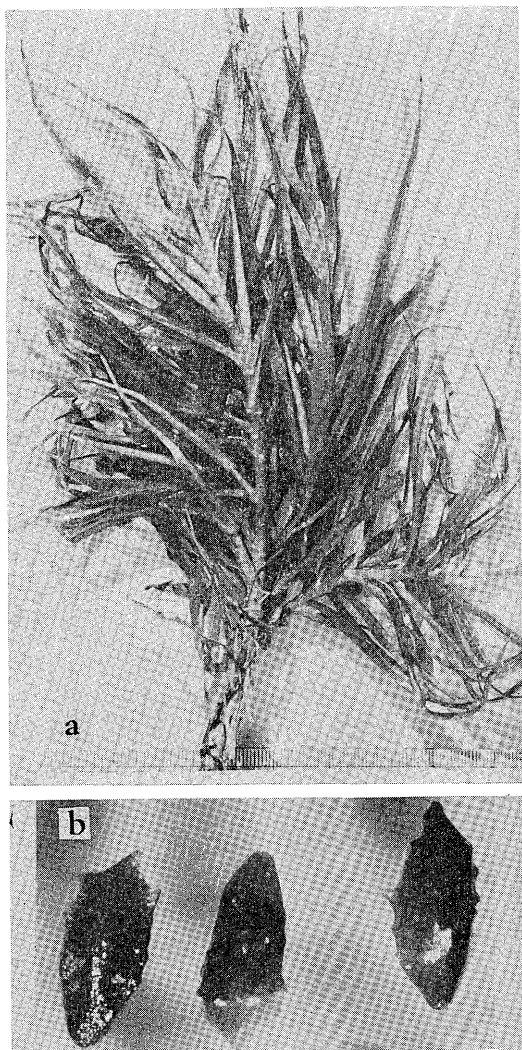


Fig. 1. *Blyxa alternifolia* (Miq.) Hartog.  
 (a) Habit. (b) Seed. ×13.

起 2-10個がある。

*Blyxa alternifolia* (Miq.) Hartog, Fl. Males. Ser. 1, 5(4) : 392, 1957.

Nom. Jap. Seto-yanagisubuta (nom. nov.)

New to flora of Japan.

Distr. Indo-China, Malaysia, Japan (Aichi pref.: Seto, Oct. 7, 1980. S. Hamashima, TNS 417932).

文献についてお世話になった角野康郎, 別府敏夫の両氏に感謝する。

(市邨学園高蔵高校)

□ Leewwenberg, A. J. M. (ed.) : **Loganiaceae**. In Engler & Prantl, Die Naturalen Pflanzenfamilien. Bd. 28 b, I. 255 pp. 1981. Dunker & Humboldt, Berlin. 長年月をかけて続けられている Engler et Prantl's Nat. Pflanzenfam. のマチン科をまとめたものである。科内の分類系と, 所属するすべての属を記述している。記述は属または節までで, 種については殆んどふれていない。以前の本に見られない新しい特色は, 分類以外の専門家によるいくつかの項目が加えられていることである。分類は最近アフリカ, 東南アジアのマチン科の研究で活躍している A. J. M. Leewwenberg と P. W. Leenhouts が担当し, F. Hallé の生活型, A. M. W. Mennega の二次木部の構造, M. I. Hooki の胚学, W. Punt の花粉, W. J. Gadella の染色体, N. G. Bisset の植物化学, N. G. Bisset の有用植物と担当して, 149頁におよび, 全体からするとかなりの頁を当てている。マチン科の中でフジウツギ類は, 茎に内生篩部がないこと, 胚乳形成, 胚分化, 植物成分などで他のものとはかなり異なり, Melchior の Engler's Syll. Pflanzenfam. (1964) ではフジウツギ科としてマチン科から区別し, ゴマノハグサ科に近縁のものとして扱っている。たとえ花の構造の見かけは似ていても, この処置は正しいと思う。ところが本書ではまたもとに戻して, 両者を同一科として扱っているが, その理由についてはあまり論議されていない。折角他の専門分野と共同で書かれているのに, 分類系にはそれが充分反映していないように思われる。科や属の類縁関係を論じることは, 本書の性格からするとかなり重視してもよいと思うが, さかれた頁数は少なく表面的な感じがする。マチン科の系統を考えるにあたっては, 内生篩部の性質は無視できないことであるのに全く論じられていない。形態学者は系統に関してはなるべく避ける傾向があるから, 形態学者との共同であっても, 編者である分類学者が, 充分形態の内容をくんで議論をまとめるべきであろう。属や種を中心に研究している分類学者でも, 系統を考えるさいには形態学の素養がなくてはならないという感を強くする。この中にあって植物化学を担当した Bisset が, フジウツギ類のみは他と異なって aucubin-type のグリコシッドを持ち, 同じ成分をもつゴマノハグサ科との類縁を考えるべきであると強調しているのが目立つ。

(山崎 敬)